

## 東海地域における南海トラフ沿いの歴史地震津波に関する 現地調査結果について

久永哲也\*(1)・内田篤貴(1)・椋代大暉(2)・佐々木哲朗(2)・岩瀬聡(2)・浦谷裕明(2)・武村雅之(3)・都築充雄(3)

(1) 日本物理探鉱株式会社 (2) 中部電力株式会社 (3) 名古屋大学減災連携研究センター

### § 1. はじめに

南海トラフでは、2011年の東北地方太平洋沖地震を契機に、内閣府によりあらゆる可能性を考慮した地震・津波の検討がなされ、過去の歴史記録を上回る最大クラスの地震・津波の想定がなされている。一方で2011年の東北地方太平洋沖地震の仙台平野における津波記録のように、過去の津波記録を検討することで、過去に同規模の津波があったことが報告されており(菅原・箕浦, 2013)、歴史記録の重要性が再認識されている。筆者らは、南海トラフ沿いの歴史地震による地震・津波像をより正確に掴むために、明応東海地震を中心に現地調査等を行ってきており、その後の調査で明らかになった南海トラフ地震の東海地域における地震・津波記録について報告する。

### § 2. 東海地域における地震・津波の調査結果

安政東海地震の地震・津波記録として、①浜松市西区舞阪町、③名古屋市熱田区、④碧南市大浜地区を、宝永地震の地震・津波記録として②牧之原市相良町の地震・津波記録の調査結果を報告する。

①浜松市西区舞阪町における安政東海地震津波の浸水状況について、羽鳥(1977)に「舞阪漁港の灯明台近くに“角屋”という旧家がある。津波はこの家(当時二階建てであったともいわれている)のカモイまで浸水した記録がある。(中略)港から押し上がった津波は、“一里塚”跡まで来たと伝えられ」とあり、羽鳥(1977)は“角屋”の痕跡をT.P.上5.6m、“一里塚”跡の地盤高をT.P.上2.4mとしている。

『舞阪町史 上巻』によれば、「水勢烈敷宿内方辰巳(南東)之方字小屋場ニ而汐除土堤打切り、潮水押込、宿内東西共海面ニ罷成」とある。舞阪宿南東の字小屋場の汐除土堤が壊れたことで、南東からも津波が浸入、一里塚跡まで達したものと考えられる。

また、舞阪在住の渡辺八郎平が、津波遭遇時の舞阪宿の浸水状況を描いた絵図がある。その絵図には、住民が舞阪宿で最も標高が高いとされる宝登山(T.P.約4.9m)等に避難している状況が描かれており、宿場の中心付近は浸水していない。

以上から、舞阪宿の中でも標高が高い所(T.P.約4.9m)は浸水しておらず、角屋の痕跡(T.P.5.6m)は、特異な結果となっている。

②牧之原市相良町における宝永地震津波について、矢沼・他(2011)では、「堀の奥に廻船が打ち入っ

た」として浸水高4.9mと評価している。一方、「根上り松」(標高約7.1m)という2本の松が、宝永地震津波により根元の砂がさらわれたため、根上りになったという伝承がある。しかし、『相良町内指定文化財解説』を要約すると、「当初は松が5本立っていたが、伊勢湾台風で枯れ、伐採した。その年輪年代を測定したところ、樹齢約240年であり、享保二年(1717)の「福岡浜通浪際土手に継続的に小松を植えた」という植林記録と一致する」とある。この根上り松は、宝永地震後に植樹されたものであったことがわかった。

③名古屋市熱田区における、安政東海地震津波の浸水状況について、『松濤棹筆 第五十七巻』に、「熱田築地へ乗り浜の鳥居の北迄も潮乗上りしと其潮悉泥水なり近付再度乗来り潮高六尺も段取り坂落しの如く堀川へ押入」とある。また、『葎の滴見聞雑割』に「熱田海上方泥をうち上ケ燈明場の辺迄至ると云」とある。それぞれの記述から、浜の鳥居よりも北まで津波が浸入し、燈明場の辺りまで至ったとされる。熱田神宮での聞き取り調査から、この浜の鳥居は七里の渡し(熱田宿から桑名宿への渡し)の船着き場に建てられていたもので、そこに常夜燈(標高約1.0m)も建てられていたことがわかった。

④碧南市大浜地区における安政東海津波の浸水状況について、『葎の滴見聞雑割』には「三州大濱ハ津波に引入られしよし」とされ、都司・他(2013)では津波浸水高4.9mと評価している。同時代史料として、大浜陣屋の公務日記である『大浜陣屋日記』を確認した。結果、「前浜新田、去ル四日地震、并翌五日津浪荒ニ付」とあり、津波被害記録は当時の矢作川河口部に位置した前浜新田のみで、他の村や社寺等では地震被害のみが記録されていることがわかった。

### § 3. まとめ

今回の現地調査の結果、同じ町内であっても一律の浸水高ではないことを示す史料が確認された。しかし、局所的に高い津波高を示す史料に関しては、その扱いについて、より慎重な検討が必要であると考えられる。今後、歴史記録を防災・減災に役立てていくためにも、現地の地形状況の確認や、複数の史料との比較検討も有効であると考えられる。

### § 4. 謝辞

調査にあたり、情報提供いただきました、熱田神宮の横地氏、飛岡氏に深く感謝いたします。